

分担研究
□疫学プロジェクト分科会報告

柳 川 洋

本年度は疫学プロジェクトは、第9回川崎病全調査成績の分析、川崎病サーベイランス事業の評価、川崎病患者におけるダウン症の発生頻度の把握、外国における川崎病疫学像の文献的考察などを行った。

全国調査は100床以上の病院で小児科を併設する2,339施設を対象とするもので、1985年1月～1986年12月の2年間に受診した川崎病初診患者の疫学像を観察した結果以下の成績を得た。(1) 1,516施設(64.8%)より回答が得られ、報告患者数は20,458人(1985年7,611人、1986年12,847人)であった。(2) 1985年12月～1986年5月にかけて大規模な流行がみられた。流行は関東地方からはじまり周辺に広がった。(3) 年齢別罹患率は0歳後半から1歳にかけて1峰性のピークを有し、男女比は1.4である。(4) γ-グロブリンの治療を受けるものの割合が年次とともに増加し、1986年には38.6%になっている。(5) 2年平均の同胞例ありの割合は1.8%、再発例3.7%、死亡例0.14%、心後遺症例16.8%であった。(6) 回答施設1,516施設の医療状況を調べた結果、断層心エコー検査を実施し

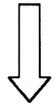
ている施設は97.6%の高率を示した。また冠動脈検査を実施している施設は17.6%であった。

1984年以来全国149病院の協力を得て、川崎病の流行を迅速に把握する目的で実施してきた川崎病サーベイランスによる流行予測の妥当性について検討した。その結果、サーベイランスにより、流行を早い時期に把握することができ、発生患者数も推定しうることがわかった。

川崎病の患者におけるダウン症児の頻度を明らかにする目的で、1985年1月～86年12月に全国の医療機関を受診した患者18,492名について、ダウン症の有無を調査した結果、4例の症例が報告された。この値は一般の小児における頻度に比べて、統計学的に有意に低い値であった。

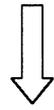
Index MedicusでKey wordをMCLSとしている論文を検索し、これに今日まで入手した論文を加えて、国別に川崎病の発生状況、流行状況をまとめた。

個別研究としては古庄らがガンマ・グロブリンの大量療法を受けた例の予後を調査し、アスピリン療法に比して冠動脈障害の残存率が低いことを認めた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 62 年度厚生省心身障害研究

「川崎病に関する研究」

分担研究口疫学プロジェクト分科会報告

柳川洋

本年度は疫学プロジェクトは、第 9 回川崎病全調査成績の分析、川崎病サーベイランス事業の評価、川崎病患者におけるダウン症の発生頻度の把握、外国における川崎病疫学像の文献的考察などを行った。

全国調査は 100 床以上の病院で小児科を併設する 2,339 施設を対象とするもので、1985 年 1 月～1986 年 12 月の 2 年間に受診した川崎病初診患者の疫学像を観察した結果以下の成績を得た。(1)1,516 施設(64.8%)より回答が得られ、報告患者数は 20,458 人(1985 年 7,611 人、1986 年 12,847 人)であった。(2)1985 年 12 月～1986 年 5 月にかけて大規模な流行がみられた。流行は関東地方からはじまり周辺に広がった。(3)年齢別罹患率は 0 歳後半から 1 歳にかけて 1 峰性のピークを有し、男女比は 1.4 である。(4)γ グロブリンの治療を受けるものの割合が年次とともに増加し、1986 年には 38.6%になっている。(5)2 年平均の同胞例ありの割合は 1.8%、再発例 3.7%、死亡例 0.14%、心後遺症例 16.8%であった。(6)回答施設 1,516 施設の医療状況を調べた結果、断層心エコー検査を実施している施設は 97.6%の高率を示した。また冠動脈検査を実施している施設は 17.6%であった。1984 年以来全国 149 病院の協力を得て、川崎病の流行を迅速に把握する目的で実施してきた川崎病サーベイランスによる流行予測の妥当性について検討した。その結果、サーベイランスにより、流行を早い時期に把握することができ、発生患者数も推定しうることがわかった。

川崎病の患者におけるダウン症児の頻度を明らかにする目的で、1985 年 1 月～86 年 12 月に全国の医療機関を受診した患者 18,492 名について、ダウン症の有無を調査した結果、4 例の症例が報告された。この値は一般の小児における頻度に比べて、統計学的に有意に低い値であった。

Index Medicus で Key word を MCLS としている論文を検索し、これに今日まで入手した論文を加えて、国別に川崎病の発生状況、流行状況をまとめた。

個別研究としては古庄らがガンマ・グロブリンの大量療法を受けた例の予後を調査し、アスピリン療法に比して冠動脈障害の残存率が低いことを認めた。